

群 教 セ	E03 - 03
	平 14 . 206 集

友達関係を広げようとする態度を育てる 学級活動

——プロジェクトアドベンチャーを取り入れた
学級集会活動を通して——

特別研修員 青木 三保

《研究の概要》

本研究は、学級活動「みんな友達」にプロジェクトアドベンチャーを関連させた活動を行うことにより、友達がいることのよさを実感し、友達関係を広げようとする態度を育てようとしたものである。朝の会や帰りの会に雰囲気づくりの活動を行い、その後プロジェクトアドベンチャーを取り入れた集会活動を行った。その経験を学級活動に関連させ、友達との協力のよさを知り、かかわりを広げる態度を身につけるための話し合いを行った。

【キーワード：特別活動 小学校 学級活動 仲間づくり 】

主題設定の理由

家庭や地域社会の中で人と人との結びつきが希薄になっている現在、子どもたち同士の結びつきも弱くなっている。そのような状況が、いじめや不登校など子どもたちが心を痛める問題にもつながってくるのではないかと考えられている。

本学級（6年 男子 23 名 女子 16 名 計 39 名）の児童の交友関係を見ると、より多くの人と親しく話をしたり仲良くしたりしていきたいと願っているが、友達関係の固定化が進んで親しく交われない状況にある。多くの児童が「仲良く協力できる学級」を『よい学級』と思っており、そのような学級ができればよいと感じている。しかし、自分より行動がゆっくりしている友達に対して責めるような強い口調で話したり、相手の気持ちを考えていないような言動が見られることもある。

これらの原因として、児童が日常生活の中で友達のよさに気がついていないことが挙げられる。そのために友達に対するイメージが固まり、友達関係が固定的になってしまっていると考えられる。共に活動する機会の多いことが、お互いの関係の深さにつながっている様子が見られるので、共に活動する機会が他の友達にも広がっていけば、人と人との結びつきを広め、深めていくことにもつながると考えられる。

児童の人間関係を広げていくためには、児童自身が自分から友達に働きかけることの大切さに気づき、進んで友達との関係を広げていこうとする態度が必要になってくる。これまで様々なところで児童がかかわれる場面をつくってみた。しかし、その中でもかかわりのかたよりが見られた。そこで、意図的に多くの友達とふれあう機会をつくれば、自然にかかわり合いを広げることができるのではないかと考え、学級活動に、体験活動を通してお互いを大切にする心を培うプロジェクトアドベンチャー（PA）を関連させた指導を構想した。朝の会や帰りの会で雰囲気づくりの活動を行い、それをプロジェクトアドベンチャーを取り入れた学級集会活動に生かし、さらに友達とのかかわりに着目した話し合い活動を行い、学校生活の中で友達と広くかかわることの大切さを意識させたいと考えた。このことを通して、友達関係を広げようとする

る態度が育ち、本校の教育目標でもある「やさしく思いやりのある子ども」にも近づけると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

学級活動「みんな友達」においてプロジェクトアドベンチャーを関連させ、雰囲気づくりの活動を行い、それを生かした課題解決の活動を中心とした集会活動、その振り返りを通した友達とのかかわりを考える活動を行うことにより、友達関係を広げていこうとする態度が育てられることを実践を通して明らかにする。

研究の見通し

次の１～３を行うことにより、友達に働きかけることの大切さに気づき、友達関係を広げようとする態度が育てられるであろう。

- １ 朝の会や帰りの会において、リレーションづくりのためのエクササイズや緊張をほぐす目的のプロジェクトアドベンチャーを繰り返し行い、活動をつないでいくことで、親和的な雰囲気ができ、たくさんの友達に親近感が持てるであろう。
- ２ 学級活動において、プロジェクトアドベンチャーの「カードラインナップ」や「フープ知恵の輪」など課題解決型の活動を意図的に取り入れた集会活動で友達とふれあったり解決方法を話し合ったりすることにより、友達のよさや友達と協力し助け合うことの大切さに気づきこれからの友達との活動にさらに期待が持てるであろう。
- ３ 学級活動において、エクササイズ「気になる自分」を行い肯定的な言葉をプレゼントされることにより、お互いのよさを理解し合い、和やかな人間関係をつくろうとする気持ちが持てるであろう。さらに学級活動「みんな友達」において、これまでの活動を基にこれからの友達とのかかわり方について話し合い、実践目標を考え、取り組んでいくことで、友達とのかかわりを広げようとする態度が身につくであろう。

研究の内容

１ 基本的な考え方

（１）「友達関係を広げようとする態度を持った児童」とは

友達と協力することの大切さを知り、今まで話せなかったクラスメートと話をすることができるようになったり相手の気持ちを考えて思いやりのある行動をとれるようになったりした児童である。具体的には児童の成長を次のように段階的にとらえた。

友達に親近感を持てる児童

日常の友達関係にとらわれず、友達とふれあうことができる児童である。雰囲気を和らげる活動を繰り返すことで、活動を楽しみ、友達に親しみを持つことができると考える。

友達と協力することのよさを感じ、友達との活動に期待を持てる児童

日常の友達関係にとらわれず友達とのかかわり、「みんなで協力して取り組んだからできた」「自分ひとりでは解決方法に気づけなかった」など友達のいることのよさに気づいていく児童である。友達と協力して活動する場面を通して「力を合わせることが大切だ」など協力するこ

との大切さに気づき、「友達同士でまたやりたい」という期待を持つことができる考える。

友達とのかかわりを広げようとする態度を身につけた児童

自分が友達にしてもらったことを喜び、それをまわりの友達に対しても広げていこうとする児童である。これまでの活動を振り返りながらこれからの行動目標を考え、話し合い、実行していくことで、そのような態度を培っていけると考える。

(2) プロジェクトアドベンチャー(PA)とは

プロジェクトアドベンチャー(以下PA)とは、体験活動のプログラムである。「冒険＝アドベンチャー」の持つさまざまな特性を生かし、これにグループカウンセリングの手法を取り入れることにより、人間としての豊かさを育むことを目的としている。PAの活動には、アイスブレ・キング(緊張をほぐす)、ディインヒビタイザ-(抑制をとる)、トラスト(信頼構築)、イニシアチブ(課題解決)がある。これらの活動の中で解決方法を全員で考え、協力しながらゴールにたどり着くことで、信頼関係が築かれ、心が開かれていく。「新しい自分を発見」し、「自分を好きになり」、「みんなと交わることの楽しさを知る」ことを体験を通して学んでいくのである。

本研究では、友達関係を広げるために学級活動において活用する。

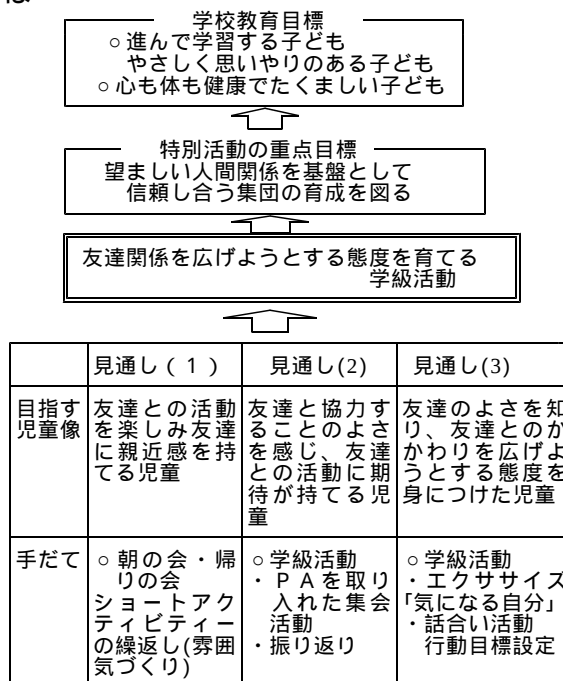


図1 全体構想図

2 実践の概要及び結果と考察

考察は、学級全体及び抽出児童の活動の様子、自己評価カード、感想等を中心に行う。

抽出児童A子は、友達関係を作るのが大変苦手な児童である。自分からは友達に話しかけることが少なく、グループを作るときなど、誰かが声をかけてくれるのを待っている児童である。そのため、学校生活もつまらないと感じている。

(1) 友達との活動を楽しみ、友達に親近感を持つことができたか。(見通し1)

ア 実践の概要

学級活動の事前活動として朝の会や帰りの会の時間を使い自分自身を振り返り、友達に紹介する「わたしは〇〇です!」という活動を行った。また、グループで話し合いができ、身体の接触の持てる活動を考え、PAの「ピーイング」、構成的グループ・エンカウターの「聖徳太子ゲーム」、PAの「フープリレー」を行った。「ピーイング」(図2)では、クラスを象徴する絵の中に、よりよいクラスにするために自分のとるべき行動・態度を書き込んだ。逆に絵の外側には、よりよいクラスづくりのためにしてはいけないことを書き込んだ。それを教室内のよく見えるところに貼り頻繁にながめて、活動のめあてとしたり、振り返りの材料にしたりした。

その他の活動は普段あまり話をしない児童同士が組むよう



図2 ピーイングイメージ図

に工夫してグループづくりを行い、活動をつなげていった。

イ 結果と考察

PAの「ピーイング」をやってみての感想では、「自分の目標になった」「みんなの考えていることがわかった」「書いたことを実行していきたい」と書いた児童が多く、これからの活動のめあてが確認できた。

その後の活動の「楽しく活動できましたか」の質問には図3のような結果が出た。A子も楽しく活動できたと答えている。活動後の感想で、活動を重ねていくごとに友達とのかかわりに関する感想を書く児童の数が増えてきている(図4)ことから、友達とのかかわりを楽しみ、親しさを増してきたことがわかる。特に友達とのふれあいを通して「いろいろな方法を考えられる友達はすごいな」「みんなのためにとてがんばっている友達がいた」など、友達のよさに目を向けた感想が増えた。このことから、児童が感じた楽しさは、ゲームの楽しさだけでなく、いろいろな友達とかかわった結果であることがわかる。またA子の「友達がやり方のアドバイスをしてくれてうれしかった」という感想からも、他の児童とのふれあいに喜びを持てたことがわかる。活動をつなぐと共に、普段あまり話をしない児童同士が組むようにグループピーングを工夫したことで友達の新たな面を感じ、ふれあいに喜びを持ち、以前より友達に親近感を持てるようになったと言える。

(2) 友達と協力することのよさを感じ、友達との活動に期待を持つことができたか。(見通し2)

ア 実践の概要

これまでの活動をさらに深めるため、学級活動の時間で集会活動を実施した。PAを取り入れ、カードに書かれた数字の小さい順に並び替える「カードラインナップ」、手をつないで円になりフラフープを通り抜けてもと通りの形に戻る「魔法の鏡」など、みんなで解決法を出し合って課題を解決していくことをねらいとする活動を行った。活動の中で個人のめあてを書かせることで、自分の活動の方向づけも行った。

イ 結果と考察

活動後の「楽しく活動できましたか」の質問には図5のような結果が出た。90%以上の児童が楽しいと答えており、楽しくないと答えた児童はいなかった。その理由として「みんな声を出して力を合わせようとしていたから」「あまりしゃべらない人とも、どうすればいいか考えながらしゃべれたから」など友達との協力に目を向けた意見が多かった。

A子は、質問には「少し楽しかった」と答え、

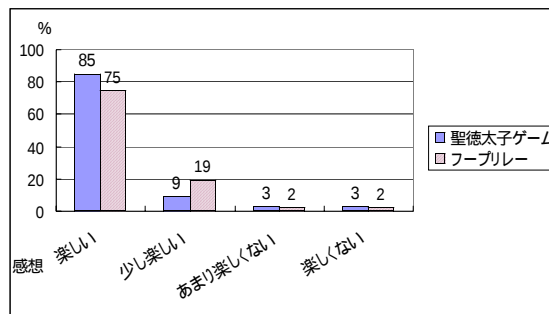


図3 活動に対する満足度

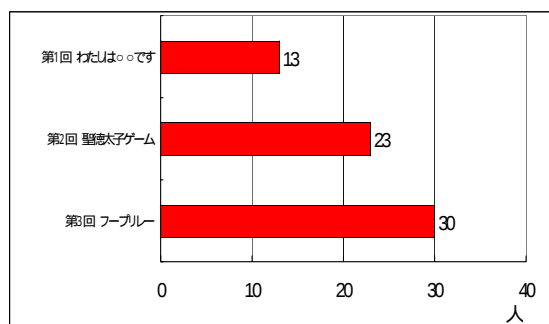


図4 活動後の友達に関する感想の数

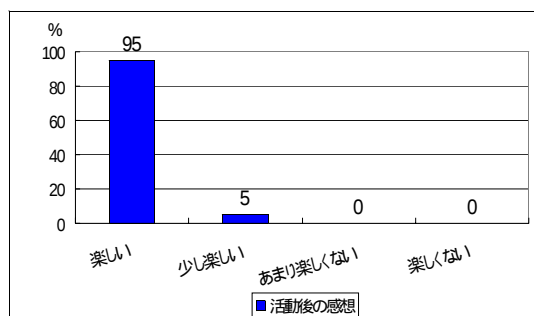


図5 PA集会 活動への満足度

理由として資料1のようなことを書いている。

事前にたてた「すばやく行動する」というめあてが達成できなかったため“少し”という評価になったが、友達とのかかわりについて複数の感想を書いたのも、自分からのアプローチについて書いたのも、今回が初めてのことだった。このことから、友達と協力していくために自分ができることをしようと考えを広げることができたことが

わかる。他の児童からも「めあてをたてて活動したらすぐにできた」「めあてカードを書いたから、声を出し合う場面が多かった」という感想が出された。めあてカードを書き具体的にめあてをたてる活動を行ったことが、友達とのかかわりを広げようとする行動につながったと考えられる。

活動中には「どうしたらうまくできるだろうか」「うまくいったときの気持ちは」などをグループでしっかり話し合った。提案をしたり感想を述べたりすることだけでなく、友達の話をよく聞くことも協力だということを前述のめあてカードでも確認したので、多くの児童が真剣に取り組んでいた。

活動での気づきを書いたものが資料2である。多くの児童が協力することのよさやチームワークについて触れている。また、友達とのかかわりのよさについて触れている。PAの活動の中で友達と解決策を話し合ったり手をつないだりするふれあいを通して、みんなと力を合わせることの大切さを実感できたからだと考えられる。

A子も、資料1で書いているように、友達と相互にかかわりを持ちながら協力していくことの大切さに気づいたことがわかる。その他A子の感想には、これからの活動に対しても「自分から遊んだり話したりする」と前向きな意見が見られた。このことから、友達と協力することのよさを感じ、これからの友達との活動に期待を持てたと言える。

(3) 友達のよさを知り、友達とのかかわりを広げようとする態度を身につけることができたか。(見通し3)

ア 実践の概要

学級活動の時間で、これまでの活動も含めて自他のよさを見つけ、見つけたことを“言葉のプレゼント”として相手に贈る構成的グループ・エンカウンター「気になる自分」を行った。その後の学級活動の時間で、議題を「みんな友達」として話し合い活動を行った。これまでの活動での感想を資料として提示し、友達に対しての自分の変化を考えた。それをもとに、これからの自分の行動目標を設定する活動を行った。その後設定した目標を聞き合い、友達としてそれをどのように支えていこうかという話し合いを進めた。さらに自己評価を行い、日常の中で具体的に行動を振り返った。

イ 結果と考察

「気になる自分」では38人中34人の児童が「この活動をしてよかった」と答えている。それ以外の児童も、「よかった」と言い切ることができなかったが、感想には肯定的な気持ちが

資料1 A子の友達関係での気づき

- ・よく分からないところやすばやく行動できないところがあった。
- ・カードの交かんのときも友達からやってくれて、すごくうれしかった。
- ・友達といろいろ話せるようになった。
- ・列に並ぶときは自分から話せた。

資料2 活動を通しての気づき

- ・みんなで協力しないとできないゲームばかりだったけど、力を合わせればできるということがわかった。
- ・チームワークが一番大切だと心から感じた。
- ・普段あまり話ができない人と話ができよかった。毎日こんな感じだったらクラス全体ももっと明るくなる。
- ・いつもはあまり一緒にいない友達と手をつなぐと、いつもより話ができ楽しかったです。

書かれていた。「自分の知らないよいところを班の人が見つけてくれてうれしかった」「みんながぼくの友達だとわかった」という表現があることから、児童の感じた「よかった」には、自分を認められたうれしさがあることがわかる。したがって、まわりの児童も友達のよさを知ったと考えられる。A子は「私は『いつも静かだったんだなあ』と思った。みんなが私のよさを知っていたことがわかった」と感想に書いており、自分のよさについて新しい発見があったことがわかる。

友達関係を広げるために大切な「友達のよさを発見できましたか」の質問に対しては、図6のような結果が出た。見通し1で行った「わたしは○○です!」の同じ質問の結果と比較すると、友達のよさを発見できた児童は26%増え、発見できなかった児童は9%減の0%になっている。多くの児童が友達のよさに気づけたことがわかる。A子は「相手のいいことを書いたので喜んでくれたし、相手が喜んでくれたのは自分もいい感じだった。自分が気づいていなかったことを教えてくれて嬉しかった」と書いている。ここでも友達のよさを認めている姿がある。その後の話合いで、活動を振り返ってみての自分の変化を考えてみたところ、資料3のような結果が見られた。これまでの活動を通して友達へのかかわり方が変化してきていることがわかる。

自分の成長を認めた上での今後の行動のめあてづくりでは、全員が自分の行動のめあてを決めることができた。友達とのかかわりを広げようとする気持ちを普段の生活の中の具体的な行動へ結びつけようとしている姿が読み取れる。その後それぞれが決めたことに対してグループや学級全体で話し合い、学級級全体で応援していくことも確認することができた。(資料4) A子は自分の友達関係を反省しながら、「あまり、だれともしゃべれなかった」のが「だんだんしゃべれるようになった」と自分の成長に気づくことができた。そして、自分の行動目標を「自分から声をかけたり遊んだりする」と決めることができた。このようなことから友達関係を広げていこうとする意欲が持てたと言える。

日常生活の中での自己評価では、A子は「○○ちゃんとふざけたり話したりした」「自分から話しかけた」と書いており、自分の決めた行動目標を意識していることがわかる。他の児童の

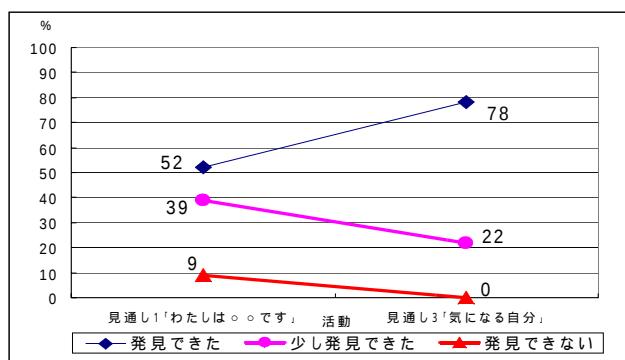
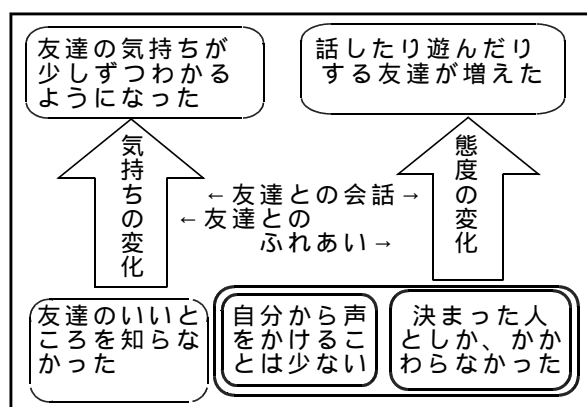
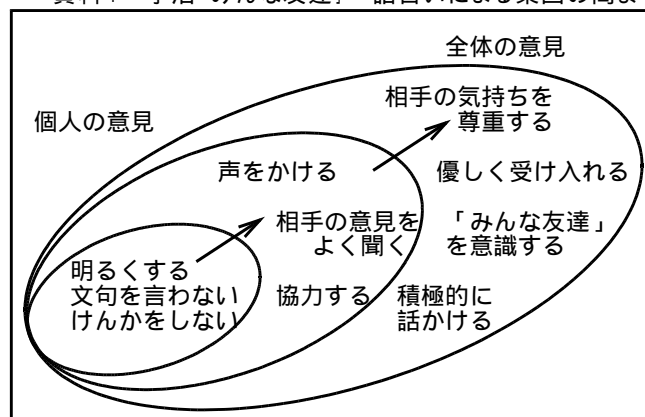


図6 友達のよさが発見できたか

資料3 活動を通しての児童変化



資料4 学活「みんな友達」話し合いによる集団の高まり



評価の中にも「普段話さなかったA子ちゃんと話せてよかった」「具合が悪くなったときにA子ちゃんが『だいじょうぶ』と声をかけてくれたのがうれしかった」と、A子とのかかわりを書いたものが見られるようになってきた。他の児童においても具体的に名前を挙げながら自分と友達とのかかわりを振り返ることができており、普段かかわりの少なかった友達のことを意識できるようになってきている。

自分や友達への思いについて活動前と活動後に取ったアンケート結果(図7)では、活動後の数値が全項目で増えている。特に普段の生活の中で「友達を大切にしている」「みんなと協力している」「困っている人を助ける」という項目が10%以上の伸びを示している。これまでとは違った目で友達を見て、かかわりを広げている結果と考えられる。

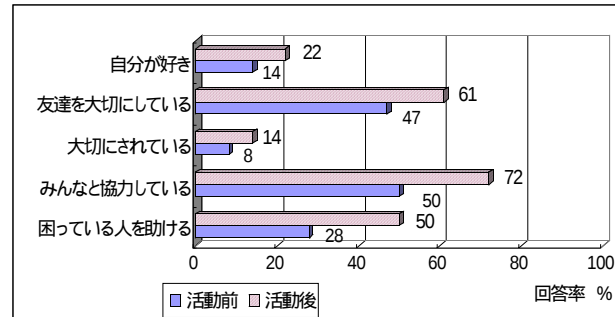


図7 自分や友達についてどのような思いが持てたか

以上のことから、活動を通してこれまで気づかなかった友達のよさを知り、友達とのかかわりを更に広げようとする態度が身についたと言える。

研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- 朝の会や帰りの会での友達とふれあう活動を繰返し行うことにより、友達に対する親しみを増すことができた。
- 普段かかわりの少ない友達と積極的にふれあったり話合ったりするPAの活動を学級活動に取り入れたことにより、あまりかかわりを持たない児童同士でも活動してみたいという気持ちを持てた。
- PAの振り返りや、よさを伝え合い認め合う活動を学級活動に取り入れることにより、児童一人一人が友達とのかかわりに関するめあてを持つことができ、友達関係を広げようとする態度へとつながった。

2 今後の課題

- PAが友達関係を広げるための手だてとして有効であることがわかったので、今後は日常生活の中にそれをどのように取り入れていけば多くの友達とふれあい、自分や友達のよさをより多面的に見つけていくことができるかを工夫していきたい。
- 自己評価を効果的に活用するなど振り返り活動を充実させて、意欲の継続を図っていくことも行っていきたい。

<参考文献>

- ・二宮 孝 / 中山正秀 / 諸澄敏之 共著 『今こそ学校にアドベンチャー教育を』 学事出版 (1998)
- ・高久啓吾 著 『楽しみながら信頼関係を築くゲーム集』 学事出版 (1998)